

竜女の妹

——『七人童子絵詞』の資料的価値に及ぶ——

田 中 貴 子

はじめに

『敵島本地』は、主人公である足引宮の婚姻譚、彼女の苦難の経緯、そして日本の安芸国への垂迹譚という三つの部分に分かつことが出来る。この第三段目に於て、足引宮と夫の善哉王、子供の太子の三人は、自国を捨てて、足引宮を復活せしめた聖人の投げた剣に導かれるままに旅立つ。一旦は剣の落下地の一つである尺迦羅國に落ち着く三人であったが、その國の三の宮として養育されていた足引宮の妹に善哉王が心を移したので、絶望した足引宮は只一人舟に乗り、もう一箇所の落下地であった日本へ来航するのである。

この段の善哉王の心移りはいかにも唐突で必然性に乏しく思えるため、以前から研究者に疑問を抱かしめるものであった。早くは小島環礼氏によって言及され、松本隆信氏、白石一美氏らの御論考がある。

善哉王の心移りは何故昔かれねばならなかったか。以下本稿では、心移りの相手である妹宮の存在に注目し、『敵島本地』に至るまでの敵島縁起譚に於る妹宮の発生と展開を辿りたいと考える。

「尺迦羅國の妹宮」という設定にこめられた、(一)姉妹神、(二)竜蛇譚という二つの要素が、縁起譚の中にどのように現われ、『敵島本

地』へと結実していったのかを述べ、最終的には、これらの要素に因する『敵島本地』成立の思想的背景を明らかにし、その管理者について一つの推論を提出してみた。

(一) 「足引宮の妹」と「尺迦羅國」

まず、足引宮の妹の存在と、尺迦羅國とのかかりについて述べる。第一の問題点は、浮氣の相手はなぜ妹でなければならぬのかという点である。これと似た設定として、小島氏は『諏訪本地』の、男神が配偶者以外の女神に通う話をあげられる。しかし、『諏訪本地』の場合は、川村二郎氏が指摘されるように、通う相手の女神(荒船大明神)の出自を、諏訪の縁起に積極的に結びつけて語りたい意図があったためである。それに対して、足引宮の妹は、敵島信仰に於て重要な神というわけではなく、『敵島本地』の当該箇所^①にただ一度登場する場面を除いては、その出自どころか存在さえも語られてはいないのである。

また、尺迦羅國という名については、白石氏の指摘のように、『法華經』巻第五「提婆達多品」に記された竜女成仏の話を想起させよう。

葦島神の縁起を記すのは『葦島本地』だけではなく、他の文学作
品や日記、記録類にもそれに関する伝承が含まれている。それらは
足引官の平生譚ではなく、『葦島本地』第三段に相当する垂迹譚が
主であるが、その中に葦島神の姉妹について記すものが見出せる。
十七世紀初頭に成立した、安芸・備後地方の地誌である『芸備国郡
志』（続々群書類従・九）の葦島の項に、次のような記事がある。

按今阿波国小鳴戸之傍堂浦有レ宮号ニ青宮一又稱ニ安芸神一相
伝葦島姫命之妹也恐田心姫命乎 青宮即滄海宮乎

これは時代の下った資料であるが、妹宮の伝承が存在したことが
確認できる。これは、更に中世まで遡りうる。しかも、そこには尺
迦羅国と関連のある竜女の姿も見出せるのである。その資料は、
十五世紀半ば、相国寺の僧、瑞翁周鳳によって書かれた葦島の縁起
譚である（『臥雲日件録抜尤』、大日本古記録。返り点は私に付し
た）。

昔推古天王御宇、一美婦人乘レ舟来、今所レ謂葦島神主之先祖
某 問ニ婦人一、自レ何来、曰、我回ニ觀海上、莫ニ如レ此
島之蔽一、將レ垂ニ跡 此間、婦人遂化成ニ大蛇一、……又
明神託宣曰、吾姉昔依ニ文殊一教化詣ニ閻所一、遂往ニ南方无
垢世界、然后不レ知ニ所在一、吾則垂迹ニ此島一、吾妹於山城
園笠執山垂迹、又次妹於伊豆江島垂迹云々、

（文安四年四月十七日条）

傍線部①は葦島神を蛇身だとするが、これは竜身と同義だと考え
てよからう。傍線部②、③では妹神の存在が確認できる。④では、
葦島神の姉が竜女であることが示され、①の竜蛇神、②、③の姉妹
神の伝承がここで結合している。このように、中世に於て葦島神に

ついでに二つの属性は、不可分のものと考えられていたのである。

『臥雲日件録』に顯著に伺える姉妹神、竜蛇神という二要素の結
びつきは、『葦島本地』にも取り込まれていると思われる。それ
が唐突に出現する足引官の妹や、尺迦羅国という園名に反映されて
いる。撚り合わされた一本の糸のように、姉妹神と竜蛇神の伝承は
絡みあいながら生き続けて来たのだと考えられる。

（二）姉妹神としての葦島神

——宗像神と神功皇后説話——

本節では、要素（一）の姉妹神について少し立ち入って述べる。

姉妹神の設定は、葦島神社の祭神を宗像神とすることに一つの証
を見る事が出来る。そのもっとも古い資料は、南北朝頃の成立と
されるがそれ以前の伝承を数多く含んでいる『大日本國一宮記』
（群書類従・二）である。

伊都岐嶋神社。（割）天照與ニ素盞鳴ニ誓給生三女内市杵嶋姫。

『延喜式神明帳頭註』や『和漢三才図会』にもこの説を引くが、
これらは宗像三女神（田心姫、湍津姫、市杵嶋姫）の名を併記す
る。縁起譚に、安芸漂着の女神を三人とすることが見えるのは、こ
れを受けたものと思われる。

瓶内に三人の貴女あり

（『源平盛衰記』卷十三）

船中に三人の女はうあり

（『七人童子絵詞』）

葦島神には、水の関係、特に海上交通の守護神としての性格が附
されている。宗像神も、『日本書紀』によると、海人族の祀る海路

守護の神であった。⑧ 葦島神を宗像神と同体だとする説は、こういった両者の性格の共通性と、女神であるという点から生まれたものであらう。

宗像神は、天照太神と素戔嗚尊とのウケヒの際に生まれた神々であり、同じ親（素戔嗚尊）から同時に誕生した三女神が三姉妹として意識されるのはごく自然である。また、海人族の祀る神には、住吉三神のように三神が一つの神格と做されるものが多かった。宗像神と葦島神が結びついたとき、葦島神という一神格は三女神を合祀したものとされ、そこから、葦島主祭神は三女神の内の誰かで、姉妹を持つという伝承に発展したと思われる。

姉妹神設定に働いたもう一つの要素は、宗像神と関係深い神功皇后をめぐる説話である。『日本三代実録』（国史大系）に、既に神功皇后と宗像神との結びつきが見られる。

勅遣_二從五位下行主殿權助大中臣朝臣国雄_一。奉_レ幣八幡大菩薩宮。及香椎橋。宗像大神。甘南備神上。告文曰。……亦我皇太神故。掛_レ毛畏_取。大帯日姫乃。彼新羅人_手。降伏賜_レ時_尔。相_レ共_レ加_レ力_倍。賜_レ天。我朝_手。救_レ比_守賜_奉利。

航路守護神として、神功皇后の新羅出征に力があつた神に、宗像神の名が挙げられている。

神功皇后説話は、中世に於てもっとも好んで語られた神々の話の一つである。鎌倉時代、文永・弘安の役により異国の襲来を経験した我が国では、いわゆる「神国意識」が興隆し、異国征伐の第一号たる神功皇后新羅出征譚は、『記紀』の頃とはまったく異った熱意を以て記されるようになる。そのような中で、宗像神と同様に出征の守護神として葦島神と神功説話との接触が行われた。

『日本書紀』の「神功皇后摂政前紀」には、新羅出征の勝敗を占うため、皇后が水に入って髪を流す場面がある。

「吾、神祇の教を被け、皇祖の靈を頼りて、滄海を浮涉りて、躬ら西を征たむとす。是を以て、頭を海水に滌がしむ。若し驗有らば、髪自ら分れて両に為れ」とのたまふ。即ち海に入れて洗ぎたまふに、髪自づから分れぬ。

（仲哀九年四月、大業本による訓下し。勅点筆者）

同じ箇所が、十四世紀の『八幡愚童訓』（日本思想大系）「寺社縁起」甲本）では次のように記されている。

御髮ヲ河ニ浸セバ、水神・竜神ノ二人ノ竜女参リ、御髮ヲ二分ク。此竜神女ハ葦島大明神、水神女ハ宗像ノ大明神ト後ニハ頭レ給ケリ。

ここでは、出征を勝利に導く神として宗像、葦島の二神の靈験が強調された形になっている。まず宗像神と結びついた葦島神は、それを媒介として神功皇后説話とも関係を深めていったのである。

神功皇后、宗像神、葦島神三者の関係は、更に拡大され、『長門本平家物語』のように、四人姉妹という設定までなされるようになる。

葦島大明神と申は旅の神にてまします、弘法興隆のあるじ、慈悲第一の明神なり、娑竭羅龍王の娘八歳の竜女にはいもうと、神功皇后にもいもうと、淀姫にはあねなり、

（巻五「葦島次第事」）

長女が竜女、次女が神功皇后、そして妹の存在といった四人姉妹の設定は、先に挙げた『臥雲日件録』なども通じるところである。こうして、姉妹神の設定は、宗像神に始まる三人から、神功皇

これらの資料は、神を仏の迹身とする本地垂迹思想に則つたものである。殆んどの神がその本地として仏菩薩や天部を持ち、更には神同志、仏同志の間にさえ本迹關係が結ばれるようになる。このような思想が盛んな時代に、蔽島神も神話的世界に影響された竜神信仰にひかれて、同じ竜王の娘である娑竭羅國の第三の姫宮が本地であると考えられたのであろう。

『日本書紀』豊玉姫説話を源とする竜神信仰は、蔽島に於る仏教勢力の拡大によって、『法華經』卷五の竜女への信仰へと移り変わったのである。先に挙げた諸例に見られる蔽島神竜女説は、神仏習合思想の興隆した時期の蔽島信仰の形を表わしているといえる。蔽島は、十二世紀頃から仏教との習合が進んだといわれる。中でも特に密教の進出の度合いが大きく、まず島内に侵入した仏教は天台系であった。島の神仏習合の様相を反映してか、天台宗寺門派の伝承には神話的竜神と仏教的竜神の混合した形が見られ、仏教守護神として体系に組み込まれていく過渡期の竜神の様相が明らかである。

安西歳之龍女タチチヲカメ 改ニ五障之鱗ワサヒ 立タテ交マツニ三従之番。即
身得ニ十種号一。即心證ニ三菩提一。父娑竭羅。母清滝神并豐
玉姫。玉依姫。

(『國城寺伝記』五一六、大日本仏教全書65)

この箇所は特に蔽島神について記されたものではないが、『法華經』の竜女の話に神話的竜神である豊玉姫、王依姫の名が挙がっているのが注目される。蔽島神が仏教守護の竜女へと変貌したのも、「父娑竭羅」、「母……豊玉姫。玉依姫」とあるように、文字通り仏教と神話的世界との結合によると考えられる。

四 『蔽島本地』と法華經

さて、ここで『蔽島本地』に戻って竜女の問題について考えてみたい。蔽島縁起譚には竜女の伝承が頻出するにもかかわらず、それを受けて成立した『蔽島本地』では、あからさまに蔽島神を竜女、ないしは竜王の娘と記す箇所は見当たらない。しかし、足引宮の出自を次のように語るとき、娑竭羅國の第三の姫を充分意識しているのは間違いない。縁起譚に見られる伝承を『蔽島本地』へと作品化する際に、表面へは出さず背後に竜女の姿を彷彿とさせるための技法だったのであろう。

さて、これより西に國あり、其國のなをば西城國となづく、その國の王の御なをば天日王と申、三番にあたり給ふひめみや、足引のみやと申奉ることぞ、

(天理図書館本、『室町時代物語集(一)』)

『蔽島本地』が、このように『法華經』の竜女を意識して物語を構築しているとすれば、他の部分に於ても『法華經』卷五の信仰が見られるはずである。

足引宮が無実の罪によって武士に引立てられる場面、彼女が『法華經』卷五を手しているが、ほぼ同様の筋立を有する『熊野本地』諸本の当該箇所では『法華經』については何の言及もない。

こんでいのはつけきやうの五のまきを、ひだりの御てにもたせ(余記)
たまひて出させ給へば、(法華經)
(天理本)

これは、当本地独自の記事と考えてよいだろう。『法華經』は他にも登場する。東城國(善哉王の故郷)に代々伝わる宝の扇には、三千世界、吉祥天女と、金泥の『法華經』が描かれていた。

また此君に、八拾貳代つたわる御たからあり、別のものにてはあらず、扇にて候ける、……三つの糸をこそかきにける、ひとつには、いながら三千大千世界を、まなこのまへにつくす、ふたつには金でいの法華經をうつしかき、中の一問には、天下第一のみめよき女房をぞかきたりける、

(天理本)

こればかりではなく、本文に『法華經』に典拠が求められる箇所が認められる。一つは、足引宮が山中で斬首されかけるところである。

やかて、ひきあげ奉り、すてに、御くびうたんとしければ、つるきたんくに、おれたり、

(白峯寺本、『神道物語集』)

これは、『法華經』「普門品」を踏まえた表現と思われる。

或は王難の苦に遭ひ、刑せらるゝに臨みて、いのち壽終らむと欲むに、観音の力を念ぜば、刀は尋に段々にはかに壊れなむ。

(岩波文庫、書下し)

また、足引宮が蘇生した後、夫や子と一緒に蘇生の術を行った聖人に奉仕する場面は、「提婆達多品」に依拠すると思われる。

さても大わうは、みねの薪をひろひたまへば、きさきわうじはもろともに、たにのみづをくみて、ひじりの御おん、おくりたまふなり

(天理本)

王は仙の言を聞きて、歡喜し踊躍し。即ち仙人に随つて、須むる所を供給して、菜このみを採り水を汲み、薪を拾ひ食を設け。

(岩波文庫)

こうしてみると、『敵島本地』に投影された『法華經』の影は大

きく、当本地が法華經信仰を基盤として成立していると言つてよいと思われる。敵島信仰史に於ける法華經信仰の源は明らかではないが、十二世紀より平氏という権門の擁護を受けて発展した敵島社に於ては、平清盛が奉納した『法華經』二十八卷(いわゆる「平家納經」)の影響も無視できないであろう。法華經信仰の広まりは、竜女を除くと敵島縁起譚には不思議なくらい影が薄く、当本地に特に見られるものである。『敵島本地』の原型は神社側による結縁勧誘の唱導であるので、神社が「平家納經」を用いて法華經信仰を広めたと考えられることもできよう。

四 女性と法華經信仰

では、このような法華經信仰が何故『敵島本地』成立の基盤となつたかを考えてみたい。そして、敵島神竜女説の生まれた背景も合わせて述べることにする。

『敵島本地』は、文献としての固定をみる前に、様々な口承の場を経て来た語りの文芸である。縁起というものは、本来寺社の人々によつて、神仏への結縁を勧めるために語られたものであり、その唱導の場には当然語り手と聞き手が存在する。縁起の享受者とは、この語り手と聞き手の両方を合せて言うものである。何故なら、縁起は享受者の持つ信仰や伝承を吸収する性質を持ち、享受者が縁起の成長に関与しているからである。この場合の法華經信仰とそれに伴う竜女の信仰も、こういった享受者たちから汲み上げた彼等の信仰の反映なのではないだろうか。

竜女をもっともよく信奉していたであろう人々を考えれば、それは言うまでもなく女性であろう。本来インドでは、女性は往生の叶わ

ない存在であった。しかし、それではすべての者が成仏できると説く大乘仏教の教えに背くので、女性の往生を説く經典が幾つか生まれた。一つは『無量壽經』にある阿彌陀四十八願のうちの第三十五願、もう一つは先ほどから述べている『法華經』の「提婆達多品」である。

女性たちは、この「提婆品」に説かれた竜女成仏を以て我が身の往生を願ったらしく、平安時代から文芸に多く取り上げられた。その代表的な例が、次の赤染衛門の歌である。

わたつみの宮をいでたる程もなくさはりの外になりけるかな

（『赤染衛門集』436、『私家集大成』中古Ⅰ）

また、今様にも竜女を歌ったものが多く見られ、このような竜女成仏をテーマとした歌がかなり人の口の端に上ったことが伺える。

竜女は仏に成りにけり、などか我等もならざらん、五障の雲こそ厚くとも、如來月輪隠されじ

（『梁塵秘抄』208、岩波文庫）

『畿島本地』とその周辺の伝承に現われる竜女信仰は、このような女性たちの提婆品信仰が形となったものと考えられる。これは、当本地の本文に、女性の享受者を意識した教訓的な評語が見られることから推測される。

（后たちが）てんにあをきせんきし給ふたくみこそおそろしけれ、

（慶応大学図書館本、『駒沢国文』15号）

あわれ女房ほどはかなくつたなきものはなし

（天理本）

さて、畿島社が他の社寺に比べて特に女性の信仰を集めていたと

いう事実はあるのだろうか。「畿島野坂文書」の中に、或る女性の願文が収められているが、これは女性にとって我が身の五障たることをまざまざと感じさせる悩みについてのものである。

……信心女大施主藤原二子日來之間致沐浴清淨、……天於女人之身月水之禪雖為常、無其止期永引事、即神明之御タヽリカト所歎申也、……

（『畿島野坂文書』一七九一号、文応二年八三三〇四月十三

日付、『広島県史』古代中世編(1)）

『神道集』などに女性の月水を神が忌むことを記すように、普通大抵の神社では月水は禁忌の対象であった。しかし、ごく個人的な悩みについて畿島神の加護を求めたこの女性の願文の存在は、畿島神が女性の願いを受け入れる神であったことを示すではなからうか。

竜女が成仏する姿に、享受者の女性たちは我が身の願いを託したのだといえる。そしてその信仰は、『畿島本地』に於て「第三の姫宮」である足引宮が、困難を経た上で明神と顕われることとして表現されている。つまり、享受者にとって足引宮は竜女であり、宮が神となることは、竜女が仏になることと等しいのである。享受者は、自らの往生への希求を主人公の神への顕現に託しているといえるよう。

足引宮が神となるためには、一旦「尺迦羅國」に夫と子供を置いて一人で垂迹しなければならぬ。これまで伝えられてきた畿島の女神の垂迹は、勿論夫や子供連れではなかったからである。それと同時に、足引宮に竜女が投影されていることを示すためにも、娑羯羅龍王の娘を連想させる名の「尺迦羅國」に結縁する必要があった

のである。

竜女と陂島神がダブルイメージとして足引宮の背後に潜んでいることは、陂島神が当本地の最後の部分で弁才天となる場面からも判る。弁才天は、十四世紀初頭成立の『溪嵐拾葉集』によると竜女と一体であると考えられていたらしく、足引宮II陂島神II弁才天II竜女という等式が成り立つからである。

ともあれ、「尺迦羅国」の妹宮は、享受者の女性たちの竜女信仰と、陂島縁起譚に見える姉妹神伝承とが溶け合った結果、必然的に創出された存在だったのである。

丙 唱導者についての仮説

——『七人童子絵詞』をめぐる——

本節までの考察により、「陂島本地」の享受者が主に女性であり、作品の内容には彼等の信仰が反映しているという推定を述べた。最後に、その語り手の位相を考え、合わせて語り手を推定する上で大きな手掛りを与えらると思われ、『七人童子絵詞』について述べたい。

語り物の場合、そのテキストは刻々と変化するものであるが、それは語り手が改作者として参加した結果であると思われる。この場合、特に顕著な傾向としては、語り手がしばしば登場人物と同化することがあげられる。時には端役として、また時には主人公として、語り手を彷彿とする存在が作品に登場する^④。

そのいずれの場合にも、語り手は語り物をあたかも自分の身近に起こった事件として語るようになるので、聞き手には強い臨場感を与えると思われる。仏典に於る本生譚は、このような語りの構造を

持つものである。釈尊が前世の物語を語った後で、「実は今語って聞かせたのはこの私のことなのである」と告げるパターンであるが、語り手の実体験か否かといった問題を超えて、語られた内容の真実味が鮮かに浮かび上がる手法だといえる。「陂島本地」でもこの手法が用いられているとすると、語り手は主人公の足引宮と重ね合わされうる人物でなければならない。この作品の主題上、神と現の過程が語られることが大切だからである。

足引宮と同化しうる女性で、しかも唱導を行う人物を考えれば、自ら陂島の巫女である内侍の存在が浮上して来る。内侍は、巫女の中でも特に高い格を与えられ、神を降して託宣したり、神楽、伎楽などの芸能を行ったことが記事に見える。内侍が唱導を行った確かな記録は見出せないが、今様の朗詠を行った形跡はあり、今様に宗教的な内容のものが多くことから、神社側が宣伝のため内侍に唱導をさせた可能性も感じられる。

足引宮、つまり陂島神が前世譚を語るという構造の原型は、巫女に神が憑いたときになされる託宣に見出される。陂島神と内侍のイメージの重なり合いを用いて、内侍が語る神の言葉が敷衍され、次第に縁起譚の形態を整えていったという過程が考えられるのである。

そのためには、一般に内侍と陂島神を同一視する傾向が浸透していなければならないが、それは幾つかの例が確認出来る。

あるひはけだかき女房のうしろのしやうじにうつりて宝殿にむかひたまへるすがたを見たるなど中人もあり

(『高倉院陂島御幸記』、群書類従18)

院の臣下が見たのはおそらく内侍の一人の姿であつただろうが、それを女神だと受け取る意識は、厳島神のイメージが美しい内侍に二重映しされていることを示している。また、『長門本平家物語』巻一「成親謀叛事」には、更に直截な記述がある。

内侍達をば大明神とこそ思い奉、

(国書刊行会本)

このように、当本地は、厳島神ニ弁才天ニ足引宮ニ内侍という、異つたレベルのイメージの重層性の上に成り立っているといえる。そのうちの内侍は、実際にこの長い前世の物語を唱導したかどうかは不明であるが、縁起譚が彼女達のイメージを借りて足引宮という登場人物を作り上げたことは充分考えられる。内侍は、厳島の古伝承を基に物語的な縁起が作られる際に、主人公の具体的なモデルとなつたという点で、縁起譚から本地物語への重要な転換軸となつたのである。

*

さて、ここで注目したいのが第二節でも取り上げた『七人童子絵詞』である。これは、足引宮の前生譚を含まない厳島縁起で、現在のところ天下の孤本である。主人公の妻になる内侍が重要な役割を果たす点で、縁起と内侍とのかわりの深さを知るには好資料である。

本絵巻は十七世紀中葉に製作された二巻本で、茨城県那珂郡弘願寺の所蔵になる(具立歴史館寄託)^⑤。製作年代が新しいことから今まで殆んど顧みられなかったが、その内容はかなり時代を遡るものと見られる。

まず、本絵巻の概容を示そう。

安芸国司・広沢中納言吉光は、任国で見染めた内侍・さ衣を妻とする。さ衣は出産の際に蛇身となって七つの卵を生むが、夫に見られたのを恥じ、雲に乗って去る。卵は順調に成長し、立派な七人の男子となり、各々宮中で重用される。ところが、中納言家の繁栄を妬んだ者の讒言により子供達は流罪となる。安芸国へ流された嫡子のよしなを、徒然を慰めるため厳島神社へ参詣する。そこで大明神に会い縁起を聞く。七人の童子は、大明神のおぼしめしにより晴れて罪を許され、再び長く宮中に仕えることになった。

豊玉姫説話を中心とした擬古的な物語であるが、注目されるのは内侍・さ衣の重要な役割である。さ衣それ自身はあくまで内侍であつて、厳島神とは明記されていないが、文中に彼女が明らかに厳島神の化身であることを意識した箇所が見られる。

一つはさ衣を蛇身とすることで、これは即ち彼女が厳島神という聖なる存在であることを意味しよう。もう一つは、中納言が妻に去られた後、陰陽師に事の次第を打ち明ける条であるが、ここで陰陽師はさ衣の素姓をこのように語る。

なかんづく此北のかたは、かりに人身とむまれ給ふといへとも、ほん地は竜神也。かのいつくしまの御はうへんによって、御身との年月契をこめ給ふ。

「本地」などという語が示すように、やはりさ衣はただの内侍ではなく、仮りに人の身と現われた厳島神だったのである。こういった発想は、厳島神と内侍の一体説なくしては生まれるものではないと思われ。

この他、**「敵島神は少将よしなをの前に老人の姿で現われ、縁起を語るが、『平家物語』巻五「物怪の沙汰」で、本来は女神の敵島神が束帯を着した上臈の姿で登場することを想起すれば何ら不自然なことではない。敵島神がどんな姿にでも変化出来ることは、やはり『平家物語』の同じ巻に述べられている。**

ともあれ、『七人童子絵詞』は、敵島神と契った中納言家の繁栄を描くことにより、神の利益と功德を説いた縁起譚であるといえる。

『七人童子絵詞』の成立は内容から見てかなり古いものであり、神の本地を「しやかつらりうわうの第三の姫宮にておハします」と、中世に流布していた説を記したり、『今昔物語集』や『曾我物語』に見える、天竺の女が五百の卵を生んだ話を引用するところから、原型は中世にすでに成立していたと考えられる。この物語の背景に、内侍と敵島神の一体説の流布状況を読み取ることは可能であり、従って足引宮の物語が成立した頃このような説が浸透していたことが考えられるのである。逆に言えば、足引宮物語に於て物語へと結晶した内侍^①敵島神説は、更にその説を露わにする方向を歩み、この絵巻の物語へと発展したのである。

敵島の縁起二種のうち、どちらとも内侍を意識して成立しているということは、内侍が縁起に深く関与していた事情を伺わせるものである。これだけから内侍を唱導者に宛てるのは些か早計の感を免れないが、縁起にもっとも近い存在の女性が内侍であることは否定し難い事実であろうと考える。

おわりに

「敵島本地」の善哉王の心変わりの謎を出発点として、縁起譚に於る姉妹神、竜蛇神の伝承を追って来たが、この謎は結局、女性享受者の存在を想定することでその意味が明らかになると思われる。

縁起譚から室町時代の本地物語への流れを考えると、一見プロットの展開上無意味に思えるものにも、その裏に脈々たる口承世界の水路が横たわっていることを忘れてはならないと思う。そのような小さな要素の一端を取り上げ、その背景を考へることが、長い時間間に培われて来た本地物語を読むことにつながって行くのである。

第六節で提出した内侍唱導者説は、未だこれを具体的に実証する資料を見出しはしないので、今後の調査研究を期するところである。語り物という流動的なものについてその語り手を特定するのは、ややもすれば恣意的になりがちであるが、本稿では敢えて作品とその周辺から、或る程度語り手の位相を推定する試みを行ったものである。

〔注〕

①「群書解題」三、「敵島本地」の条。「垂跡説に近くなつて、不必要かと思われる尺迦羅国で、善哉王が妃の妹に思いを寄せる話があるが、なぜか、訪諏の本地にも甲賀三郎が、妻以外の女性に通う話として見られる語り方で、もとは、なにか意味があったのであろう。」

②「中世における本地物の研究」(『斯道文庫論集』九輯)。

「……このように尺迦羅国での一寸した出来事が記されている。何のためにこのような話を入れたのかと疑問を感じさせるが、これは、足引宮を一人だけ先に日本へ渡らせる必要があったため

はないかと思われる。」

⑧「異本蔽島の御本地『宮嶋由来記』の性格」(『宮崎大学教育学部紀要』36号)。「本地譚において種々の苦難を受けた足引宮が正覚……(中略)……するには沙羯羅因に一度入り、龍女に縁を結ぶ必要があったのである。……この結縁は文芸享受者の希いでもある。」

④「蔽島本地」以外で、蔽島の縁起やそれにまつわる伝承を含む資料をこう呼ぶことにする。

⑤「語り物の宇宙」(講談社、二六年)。「……しかし、物語の語り手には、何よりも、彼自身に近い風土、信州から上州野州にかけての土地の代表的な神々の素姓を、明示しておくことが肝要だったのだろう。」

⑥『日本書紀』神代、一書第三に「今在ニ海北道中一、号曰ニ道主貴一」(古典大系本)とある。

⑦「豊姫」と「よど姫」は同一人物を指す。名前の違いは、豊玉姫からイメージされた「とよ姫」が転訛し、水に関係のある用字を宛てられた結果であろう。『神名帳頭註』に、次のような例がある。「……肥前国佐嘉郡 興止姫神有ニ鎮座一 一名豊姫 一名淀姫」(大系本『風土記』より)。

⑧『中国、西国の修験道』(山岳宗教史研究叢書12、名著出版、一九三年)。

⑨「さて八しやくの御くしをゆりなかし、いてさせたまひけるこそ、あはれなり、」(杭全神社本、『室町時代物語集』(一)。)とあり、女御の髪が簾にからまる描写しかなされてはいない。

⑩この経典は、各巻々頭に豪華な絵を描き金箔を施した、美術史

的にも価値の高いものであるが、当本地の「金泥の法華経」がこれを意識したものでどうか、興味深い問題である。

⑪「諸社禁忌」(続群書類従、三下)には蔽島神社のことは見えないが、諸社が月水を忌んでいたことは伺える。

⑫「しやうじんの弁才天とげんじ、一さひのしゆぜうを、なんぞ諸願満足せざらん哉」(衆生)

(天理本)

⑬『溪嵐拾葉集』卷三十六に「以童女習弁財天事」という一項がある(大正蔵第七十六卷)。

⑭例として、『曾我物語』の「大磯の虎」と、曾我語りを行った女性唱導者の関係があげられる。

⑮『梁塵秘抄口伝集』卷十には、内侍の神楽の様子が描かれる。「其国の内侍二人、くろ、釈迦なり。からそうぞくをし、かみをあげて舞をせり。」(岩波文庫)。また、内侍に神が憑依することもあった。「内侍どもあつまりて夜もすがら御神楽あり。ふく

るほどに。七つになるこ内侍あるに神つかせ給て。はじめはたふれふして。時中ばかりたへいりにし。」(『高倉院蔽島御幸記』、群書類従、十八)。

⑯西岡虎之助氏『日本女性史考』Ⅳ「宮島の内侍」。(新評論、一九七年)。

⑰宮田正彦氏によって翻刻紹介されている。(「瓜連町弘願寺蔵本『七人童子絵詞』について」、『茨城県立歴史館報』11号)。

⑱『七人童子絵詞』で、さ衣が夫のもとを去るときの様子は次のようである。「俄に北のかたの、御けしきかハリてものすこく、大しやのかたちになり給へは、……空よりくる雲まひさかりつ

、北のかたをのせまいらせてあかりける。」この黒雲のイメー
ジは、『長門本平家物語』の次の記事と共通するものがある。
「(弘法大師は)天台山に上り、あかの水を取つて樋に入れて天
に投げらる。黒雲来り、是を巻上げて、我朝高野の峰に置く。：
：この黒雲と申は嚴島の御妹のよど姫の威現なり。」(巻五)。
黒雲に乗つて去るさ衣に、嚴島神の姿が感じ取られると思われ
る。

⑨「たとへば、大内の神祇官とおぼしき所に、束帯整しき上臈達
数多おはして議定のやうなる事ありしに、末座なる人の、平家
の方人し給ひけるとおぼしきを、其の中より追つ立てらる。彼の
青侍夢の中に、『あれはいかなる上臈にてましまし候ふやらん』
と問ひ奉れば、『嚴島の大明神』と答へ給ふ。」(『平家物語全
註釈』)。

⑩注⑨の続きにはこのような条があり、嚴島神の變化が語られ
る。「夫れ神は和光垂迹の方便まぢまぢにましますば、或時は
俗体にも現じ、或時は又女神ともなり給ふ。誠に嚴島の大明神は
三明六通の靈神にてましますば、俗体に現じ給はん事、かたかる
べきにあらず」とぞ申しける。」

⑪『今昔物語集』巻一「般沙羅王五百卯、初知父母語第六」、及
び『曾我物語』巻六「弁才天の御事」。

〔付記〕『七人童子絵詞』の存在と関係論文を御教示頂いた松本
隆信先生、資料閲覧に便宜を与えて頂いた茨城県立歴史館の方
々、成稿に当たり終始御指導頂いた稲賀敬二先生に感謝申しあげ
ます。なお、書名、引用文の旧字体漢字は、すべて私に新字体に
改めました。

— 広島大学大学院博士課程後期在学 —